

非文字資料研究センター 10 周年記念シンポジウム

「非文字資料研究の過去・現在・未来」

日 時：2019 年 2 月 16 日（土） 10:00～17:00

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 305 号室

第 1 部 10:00～12:30 「非文字資料研究の 10 年」

司 会：孫安石（センター研究員）

【開会挨拶】 小熊誠（センター長）

【講 演】 田上繁（客員研究員・元センター長）

「センターの開設と非文字資料研究の可能性」

【各研究班からの報告】

- ・「戦時下日本の大衆メディア」研究班
安田常雄（センター研究員）
- ・「東アジア開港場（租界・居留地）における
日本人の諸活動と産業」研究班 大里浩秋（センター客員研究員）
- ・「近代沖縄における祭祀再編と神社」研究班
後田多敦（センター研究員）
- ・「日本近世生活絵引—行列から見る都市生活空間—」研究班
渡辺美季（センター客員研究員）
- ・「絵画・版画・写真に見られる 19 世紀ヨーロッパの都市生活」研究班
熊谷謙介（センター研究員）
- ・「中世景観復原学の試み—北九州市若松区の惣牟田集落を事例として」研究班
田上繁（センター客員研究員）

【ディスカッション】

第 2 部 13:30～15:30

司 会：大川啓（センター研究員）

【講 演】

- ・「絵折櫃をめぐる—「モノ」の名付けにおける歴史と民俗—」 黒田日出男（東京大学名誉教授）
- ・「非文字と非文字資料」 福田アジオ（元センター長・元神奈川大学教授）

第 3 部 16:00～17:00 総合討論「未来に向けて」

司 会：小熊誠（センター長）

- パネラー 黒田日出男（東京大学名誉教授）
福田アジオ（元センター長・元神奈川大学教授）
- コメンテーター 佐野賢治（センター研究員）
内田青蔵（元センター長）
鳥越輝昭（センター研究員）

閉会挨拶：佐野賢治



21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究成果を継承し、その後継機関として非文字資料研究センターは 2008 年 4 月に発足したが、2018 年で 10 周年を迎えることになった。「非文字資料研究」は日本のみならず世界においても「HIMOJI」として新たな研究領域を確立し、発展してきたが、この 10 年だけ見ても研究の傾向に変化が見られる。今回、10 周年記念シンポジウムを開催し、非文字資料研究の過去・現在・未来を検討することによって、非文字資料研究が引き継ぐべき過去の豊かな遺産は何なのか、センターは今後、どのような機能を果たしていくべきなのかなどを、旧来関わった多くの研究員の方々と交えて、討議する機会を企画した。

プログラムは第 1 部として、この 10 年を振り返るといふ趣旨のもと、現在の研究班の代表者を中心にご登壇いただいた。10 年間に得られた研究成果と現在向かっている方向、試行錯誤を通して見えてきた非文字資料研究の意義や課題が報告された。

第 1 部 非文字資料研究の 10 年



田上繁氏

最初に、非文字資料研究センター長(2011-2013 年度)を務められた田上繁氏により、第 1 部の基調講演「センターの開設と非文字資料研究の可能性」が行われた。21 世紀 COE プログラム採択から、今後の非文字資料研究の展開の可能性に至る

までが概観された。

21 世紀 COE プログラム(2003-2007 年度)では、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」と定義された研究の「拠点」を作ることが主眼であったのに対し、センター発足以後は、どのように非文字資料研究を体系化していくかを課題としてきた。具体的には、COE 時代は図像、身体技法、環境・景観の 3 分野において共同研究が推進されていたが、センターではそれをふまつつも、3 年間の共同研究を各グループが立ち上げ、期間終了後に同じタイトルでの研究を継続しないという制度を確立したことが、10 年間の多様な共同研究成果の一覧とともに紹介された。センターに残された課題として、①身体技法の分野における研究の取り組みが弱いこと、②日本常民文化研究所や国際常民文化機構との研究テーマの差異化、センターのさらなる独立化が必要であ

ること、が挙げられ、センター発足前史まで振り返って見えてくる重要な指摘であるように思われた。最後に今後の可能性として、現在田上氏が取り組んでいる「中世景観復原学」を例に、COE 時代の「環境・景観」分野の研究から引き継がれたものを示しつつ、オーラル・ヒストリーによる資料を活用することで、既存の研究を乗り越えることができるという展望が紹介された。

基調講演を受け、現在の研究グループを代表する方々が、センターでのこれまでの研究の展開を振り返りつつ、現在行っている研究の要点と課題について報告した。

「戦時下日本の大衆メディア」(国策紙芝居班)(安田常雄): この班は 2014 年度に発足した研究グループであるが、日本全国だけでなく海外にわたる調査や、日本児童文学学会特別賞を受賞した『国策紙芝居から見る日本の戦争』(2018)に結実する研究成果など、充実した展開を示している。その中で浮かび上がった研究課題として、メディア性(国策紙芝居と街頭紙芝居の比較、同時代の映画や流行歌、演劇、漫画などとの比較、またそれらのメディアミックスといった現象の解明など)、コミュニケーション形態(国策紙芝居は誰がどこで、どのように演じたか、町村サブリダー層が果たす役割など)、地域の特徴(朝鮮・台湾・中国占領地・東南アジアに見られる紙芝居と、植民地支配のあり方による差異など)が取り上げられた。メディア論的視座は、資料へのアプローチにおいて重要であるものの、現在までの非文字資料研究であまり取り上げられてこなかった視点であり、重要な指摘であった。



第 1 部 各班からの報告の様子

「東アジア開港場(租界・居留地)における日本人の諸活動と産業」(租界班)(大里浩秋): COE 期から、戦前に中国と朝鮮に置かれた日本租界の歴史と現況を調べてきており、中国史研究者と建築史研究者を中心とした共同作業により、センター前史を含めれば 3 冊の著作



『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』、『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』、『租界研究新動態』(中国語)と多数の論文を発表してきた。浮かび上がった課題としては、蘇州・大連・青島や台湾など、資料の活用がまだ進んでおらずまだまとめるには至らない研究があることが挙げられた。研究対象の拡大・多様化に伴って研究成果を出すのに時間がかかってしまうことは、多くの班が共有する問題ではないだろうか。また、横浜外国人居留地研究会全国大会への参加や研究会の共同開催を行っており、2019年秋にも神奈川大学を会場に外国人居留地全国大会を開催する予定となっている。隣接領域の研究会・学会等とのコラボレーションは、非文字資料研究全体でも、またそれぞれの班においても不可欠のものであり、非文字資料研究の固有性を打ち出すのと同時に、他分野への応用可能性を示すことも重要であるように思われる。

「近代沖縄における祭祀再編と神社」(海外神社班)(後田多敦):本班は2017年度から沖縄をフィールドにして研究活動を進めているが、その母体となった海外神社研究はCOE時代から進められてきている。公開研究会は毎年行われ、神社関係者の講演や祭祀映像の上映などあつて、多数の参加者を集める活発な研究グループである。また研究のみならず、沖縄の神社・寺院・御嶽などの共同調査を進めている。今後の検討課題としては、①海外神社研究に琉球も併せて考えることで、日本の植民地支配の「前史」を浮かび上がらせ、他地域の支配に継承された部分と差異を見ることができないか、②例えば御嶽は民俗学者が、神社は当事者のみが研究する傾向があり、歴史学や民俗学の間でそれをどのように通じ合わせ、共通の土壌を作るか、③首里城の「復元」が一方で歴史の「消去」であるように、非文字資料研究という視点をどのように王権の儀式等の解明につなげていくか、が挙げられた。特に②については、領域横断的・共同研究的な性質を帯びる非文字資料研究が突き当たる普遍的な問題として、重要な指摘であつた。

「日本近世生活絵引—行列から見る都市生活空間—」(日本近世生活絵引班)(渡辺美季):この研究グループはCOE期に進められた『日本近世生活絵引』(北海道編・東海道編・北陸編)の制作を引き継ぎ、第2期(2011-2013年度)では「奄美・沖縄編」、第3期では(2015-2016年度)では「南九州編」を調査・編纂した。第4期では、日本の近世は参勤交代・外国使節等の行列が定期的に列島を往来する「行列の時代」であることに着目して、「行列および行列を迎える都市空間の様相」の研究を行っている。このように絵引制作を続けてきて得られた手法と

しては、元来の絵引のように絵巻に描かれている事物の解説にとどまるのではなく、参考図版を取り入れながら複合的な解説を試みたことが挙げられた。また分析対象の専門的な研究だけでなく、そもそも「絵引」とは何かという理論的・方法論的考察や、同様に絵引研究を進める他の研究グループとの意見交換が必要であるというコメントについても、絵引に携わる本報告執筆者にとって大きく頷いた言葉であつた。

「絵画・版画・写真に見られる19世紀ヨーロッパの都市生活」(ヨーロッパ班)(熊谷謙介):COE期の課題として挙げられていたのが、欧米を対象とした研究の不足であり、それを補完する意味もあつて、欧米の都市生活を対象として2011年に「ヨーロッパ近代生活絵引」研究が立ち上がった。文学・美術研究者であつたメンバーの多くが突き当たつた問題は、図像を「作品」として見る立場から「資料」として見る立場へ、「描かれ方 how」を見る立場から「何を描いているのか what」を見る立場への移行というものであつた。しかし、研究を進めていく中で得られたのは、むしろ視覚資料を「客観的に」「ベタに」読むことにとどまってはならず、その資料がどこに由来し(from)、何を媒介とし(by)、どこに向けられているか(to)に留意する必要があるということである。この点で昨今の文化研究の展開を導入することは必要なのであり、メディア分析という視点は「戦時下日本の大衆メディア」の報告にも通じるものであつた。また「純粋・真正の」伝承を発掘するだけでなく、近・現代の「不純・変容した」伝承も考察対象とする意義も強調された。

「中世景観復原学の試み—北九州市若松区の惣牟田集落を事例として」(田上繁):基調講演でも示されたように、COE期の「環境・景観」分野の研究の延長線上に位置して、北九州をフィールドに活動を進めている研究班である。歴史学・民俗学・建築学の共同研究として進められており、竹森次貞の子孫の墓の発見から、田畑の耕作まで実践する調査活動が、写真・報告によって示された。

各班の報告後ディスカッションが行われたが、班報告が予定された時間を超過し、十分な時間が確保できなかったことが惜しまれる。COE期の中核となつていた方からのコメントを聞き、現在の研究班の研究内容には反映されていないが、引き継がれるべきプロジェクトが多く存在するを感じた。本シンポジウムの意義は、班という枠組みも、COE/センターという時代も超えた意見交換の場とすることにあつただけに、今後の機会のための反省点としたい。(熊谷謙介)

第2部

「絵折櫃をめぐる―「モノ」の名付けにおける歴史と民俗―」

黒田日出男（東京大学名誉教授）



黒田日出男氏

第2部は、黒田日出男先生と福田アジオ先生に講演をお願いした。

黒田日出男先生は、絵画資料から日本歴史を研究されてきた、ある意味では非文字資料研究の大家とも言える研究者である。とくに非文字資料研究センターにおける生活

絵引研究ではその先達であり、十分参考にすべき絵画資料の研究者としてそのお話を伺う絶好の機会となった。黒田先生は、「絵折櫃をめぐる（上）（下）―絵画史料論の基礎研究―」ⁱを資料として、絵画資料からみる歴史について語ってくださった。

黒田日出男先生は、澁澤敏三と日本常民文化研究所編による『新編絵巻物による日本常民生活絵引』（以下、『絵引』と略す）に強い関心を持たれていた。しかし、この書籍に対して何点か意見をお持ちであった。第一に、中世の代表的な絵巻だけに限定されている点。中世の絵巻は数百点もあり、研究の限界があるというご意見である。この点は、その通りであり、中世絵巻に関してはこれ以降現在に至るまで進展はない。ただし、非文字資料研究センターの成立以後、近世における各地の絵画資料を対象に絵引研究は展開されてきた。COEの時代ⁱⁱに「日本近世生活絵引」として北海道編、北陸編、東海道編、そして中国江南編と朝鮮風俗画編と東アジアにも絵引研究を広げた。非文字資料研究センターになって、奄美・沖縄編と南九州編、そして18世紀ヨーロッパ生活絵引を刊行している。

第二に、主として宮本常一などの民俗学者による仕事であり、歴史学・建築史学・都市史・風俗史・服飾史・道具史などさまざまな関心と視覚による「名付け」の研究が必要だと述べられている。これに対して、COE時代および非文字資料研究センターでは、民俗学者だけでなく、むしろ歴史学者や絵画史学者も含んで絵引資料研究は行われている。

第三に、絵引研究では、「もの」の「名付け」が主に行われているのだが、その「名付け」に対して文献資料などによる根拠が示されていないと指摘されている。絵引研究は、基本的にある図に対して、そこに描かれてい

る「もの」の名を記し、参考資料を見ながらその絵に対する図版解説を書いている。図版解説には、その図の概要や描かれている「もの」の説明などが書かれている。それは、もちろん歴史学者が徹底的にその歴史的分析を行っているわけではない。黒田先生は、描かれている「もの」の「名付け」の根拠を文献資料などから徹底的に解明していくことが研究の目的として指摘されている。

以上の三点を基本として、『近世風俗図譜』⑩歌舞伎の巻に描かれている、脚付きの箱状の「もの」について、その働きを判断して、その機能から「名付け」を試みている。この脚付きの箱状の「もの」は、『近世名所図屏風』の①から⑬まですべての巻を見て、描かれている内容を見ていく。その他、『桃山時代の祭礼と遊楽』に載っている「13 洛中洛外図」やその他の本に載せられているさまざまな屏風に描かれている脚付きの箱状の「もの」を見ていくと、近世初期風俗画のあちこちに描かれていることを示した。

黒田日出男先生は、これらの観察から、この脚付きの箱状の「もの」について次のようにまとめている。第一点は、この脚付きの箱状の「もの」は、饅頭その他の料理を入れて運ぶ容器であり、蓋付きである。第二点は、この脚付きの箱状の「もの」が描かれているのは、「かぶき」小屋などの棧敷や東山などの野外の遊園の場面に限っている。第三点は、小袖姿の男たちによって届けられる、「仕出し」の料理を入れた容器であることが分かった。ⁱⁱⁱ

このように、脚付きの箱状の「もの」の描かれ方を徹底的に見ることから、この「もの」の「名付け」はどうであるのかを検討していった。曲げ物研究の一人者として民俗学者の岩井宏實をあげ、『絵引』をはじめ『年中行事絵巻』や『鳥獣戯画』などを参考に指摘された曲げ物から、脚付きの箱状の「もの」は「絵折櫃」と「名付け」ることが適切だとした。^{iv}さらに「折櫃」を事典等で検索し、「脚付き折櫃」あるいは「脚付き絵折櫃」と「名付け」ることを提唱した。面白いのは、脚付き折櫃は、16世紀末に描かれるが、18世紀になると描かれなくなるという点である。それは、野外の遊楽と共に登場して、野外の遊楽が減少して邸内の遊学に変化すると脚がなくなっていくという。^v

その限定された時代の「脚付き折櫃」を絵画から見通すのは、やはり黒田日出男先生の絵画資料から見る歴史学の視点を表現され、非文字資料研究センターも今後の研究方法に大いに参考になったと思われる。



「非文字と非文字資料」

福田アジオ（元センター長）



福田アジオ氏

次に、非文字資料研究センターそしてそれ以前の21世紀COEプログラムの責任者をしておられた福田アジオ先生に、「非文字と非文字資料」というタイトルで非文字あるいは非文字資料とは何かについて語っていただ

いた。まず、組織の歴史について述べられた。2002年から文部科学省で設定された21世紀COEプログラムに対して、神奈川大学も申請しようということで、2003年度から「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトルで申請した。その時は、「非文字」という言葉に深い意味はなかった。図像資料、身体技法資料、環境資料の三つの資料を対象に、民俗学、文化人類学、歴史学、社会学などさまざまな研究領域から人類文化研究を行うという体制で、2007年度まで5年間21世紀COEプログラムは継続した。膨大な研究成果を提出し、最終評価でA評価を獲得した。そして、補助授業終了後の持続的展開については、「非文字資料研究センター」を設置するというで現代に至っており、これからもセンターの活動は発展していくべきものだと考えられている。

用語としての非文字は、川田順造『無文字社会の歴史』（1976年）にすでに提出されている。川田氏は、神奈川大学の特別招聘教授の経験もある文化人類学の研究者で、西アフリカにおけるモン族の文字を持たない無文字社会を対象とした研究は有名である。この本では、「二

非文字資料の一般的性格」として、道具の遺物や建造物の遺址、人骨など過去の資料と口頭伝承、記号化された楽器の音、儀礼など生きた人間によって継承される資料に分けて非文字資料として分類している。^{vi}この用語は、福田先生と同窓で親交の深い高橋敏氏が、近世の村の民衆文化を研究する中で、近世の村の農民が読み書き算用の文字文化を獲得していったと同時に、村の民衆文化には口承や生活伝承の方法をとって連綿と続く無文字文化が存在する^{vii}として無文字という語を使用している。福田先生は、高橋氏は1980年代に川田氏の影響を受けて無文字を使ったと述べている。そして、高橋氏は、1999年の『近代史のなかの教育』で「非文字文化への旅

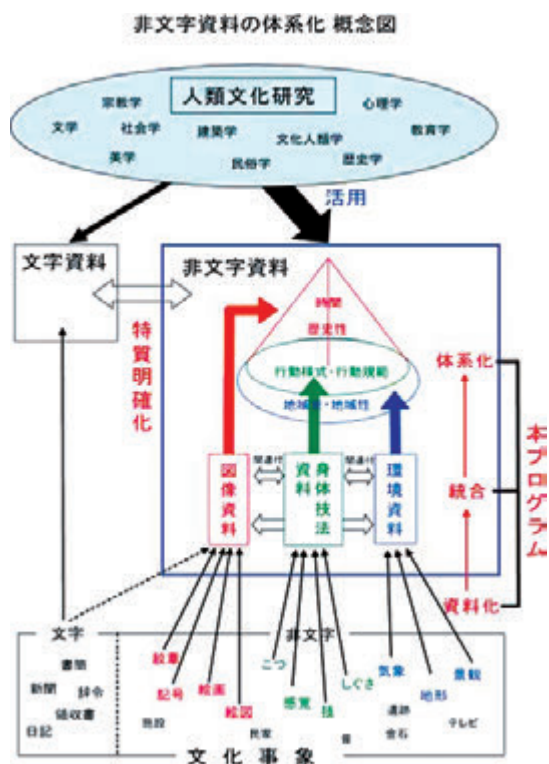
として非文字を使用するようになっていく。^{viii}高橋氏の中で、歴史研究の中において、無文字から非文字へという言葉の変化が行われた。民俗学では、1986年に大月隆寛が、『民俗学という不幸』という本で「口頭の（非文字的な）伝承」と「非口頭の（文字的な）伝承」と使っている。^{ix}1986年だから、かなり早い時期の使用であった。（初出論文は1986年だった。また、ここでは「民俗」の意味を八つのケースに分けて説明しようとしただけで、非文字の意味について検討したわけではない（筆者解説））。

神奈川大学では、たまたまCOEが始まった2003年に、吉川良和氏が『中国音楽と芸能—非文字文化の探求—』という本を出されている。吉川氏は、伝統的な中国の音楽研究を行う中で、「文字文化」は「非文字文化」と相互に影響し合い、補完し合う関係にあるが、「非文字文化」は各地で自発的に発生して分立して、「文字文化」よりも長い歴史を持ち、各々が「口伝心授」という「継続性」によって「伝承」を保ってきた。目下、中国では「非文字文化」が文字よりもはるかに多い情報量を含容して伝承、蓄積ができる媒体を得て、大規模な整理と研究が進行している。日本においても非文字文化の蓄積において、中国に比べて遜色はない。非文字資料の研究から相互の差異を正しく理解し、相互に学び合える方法を探索しなければならない、と吉川氏が述べている点を筆者は補足しておく。^x

福田先生自身は、1990年の『可能性としてのムラ社会』の中にある「情報の民俗学」の章で、非文字という言葉を使っている。ムラにおける情報伝達は、文字だけではなく、イイツギ（言い継ぎ）による言葉による情報伝達がある。それだけでなく、太鼓、鐘、板木のように特定の場所に固定されていて、それを打ち鳴らして寄り合いを知らせたり、葬儀や火事など臨時のことを知らせたりすることもある。また、常夜灯で講を知らせたり、提灯で祭礼の山車や神輿の運行を指示したり、松明で葬儀の先頭を歩いたり、魚見小屋からの焚き火で魚を捕ったりした。このような、音や光の情報伝達もあり、非文字の情報伝達がムラ社会では重要だったことを示している。^{xi}

しかし、これらは個別に非文字という言葉を使っていたのであり、本格的に非文字資料を対象に研究を始めたのは神奈川大学COEだった。その5年間でHPをはじめ多くの出版物で「非文字」という文化を発信していき、そのために非文字が親しまれていったと福田先生は総括して述べた。

次に、福田先生は非文字の資料化について述べている。非文字は、もともとなかった言葉である。新しい言葉で



表

あるから、検討するのもこれからになる。川田順造氏によって表された無文字は、文字が存在しないことが前提としている。それに対して、非文字は文字の存在が前提、としてあり、文字によって表現されない事象である。文字に記されている資料は、ほんのわずかにしか過ぎないが、非文字資料は、何でも入ってしまう。その資料としての性質は異なり、多様な方法で分析される。それを、COEの時に一覧表化した(表参照)。それぞれの文化事象を区別して資料化し、それを空間的な広がりや時間的な深さの中で位置づけ、体系化していく。センターでは、歴史研究にとって非文字資料はいかに貢献するかは理解されているだろうが、さらに広げて人類文化研究の中で、多くの非文字資料を研究すべきである。

非文字資料というのは、圧倒的に現在のものである。その現在のものを、歴史研究として過去の時間軸との関係で活用することになる。その意味で、マルク・ブロックと柳田国男を紹介している。マルク・ブロックは、フランスの歴史学者であり、1944年にフランスのレジスタンスとしてナチスドイツによって銃殺されている。1970年代に日本で流行した、社会史の創始者の一人である。『歴史のための弁明』が1956年に日本語訳が出ている。出だしは有名であり、「パパ、だから歴史が何の役に立つのか説明してよ。」^{xii}という少年の問いかけに対して、意識的にせよ無意識にせよ我々は過去を再構

成するのに役立つ要素は、常に日々の経験からひたすら借り着て、必要な場合はそれに新しい要素を付けるとし、現在のことをわかった上で、過去が認識できると述べた。また、『フランス農村史の基本性格』に、「過去を解釈するために、まず注目すべきものは、現在、または少なくとも現在にきわめて接近した過去である」^{xiii}という時の流れを逆に辿っていく逆行的方法を提唱し、現代から研究を出発されるということをマルク・ブロックは述べ、社会史の一つの考えとなっている。

柳田国男は、1934年の『民間伝承論』で「現在生活の横断面の事象は、各其期限を異にして居る」^{xiv}として、横断面の資料で立派に歴史が書けると柳田は述べている。自分はこの考えに与してはいないが、柳田は現代で歴史がとらえられると言った。その翌年に出版された『郷土生活の研究法』で、柳田は「文化は継続しているので、今ある文化の中に前代の生活が含まれているのである。文字に書いて残したものと比べて、史料としての価値がどれだけ違うだろうか」^{xv}と述べて、無記録住民の歴史がわかると言っている。

この二人の考えは、重要である。手続き的方法には問題があるかもしれないが、少なくとも現在をとらえて過去を解いていき、昔を再構成するということが必要である。それは、非文字の問題である。この考えを継承し、発展させて、非文字研究として現代の理論をどのように創っていくかが重要なことだと思う。

福田アジオ先生が、15年前に考えたことから非文字資料研究の課題をまとめた。現在、非文字資料研究センターには図像資料、身体技法資料、環境資料と三つあるが、これらに限定されるわけではない。非文字資料にはさまざまな姿や形があり、その中で資料化方法を開発していくことが必要である。そして、さまざまな非文字資料を統括したあと相互関係の設定が重要である。午前中に六つの班の発表があり、それぞれの班の相互理解があまりなされてこなかったという反省があったが、それぞれの非文字の相互の関係は個別であるが、それが全体像をつくる。それを相互に関連づけて、その相互関係を考えていかなければならない。非文字資料研究が、歴史的研究に限定されているわけではなく、さまざまな学問が非文字資料を活用できる。少し非文字研究が固定化されているような気がするが、もっと学際的に研究が行われるべきだと考える。

第3部 総合討論

小熊：それぞれの班の関係を知ること、そして、他の班



第3部 総合討論の様子

との交流は重要なことである。今回、他の班の人たちと集まって一緒に研究会を行うことはいいことではないかと言ったら、このような研究会はCOE時代は半年に1回くらいやっていたそうである。非文字資料研究センターになって、このような他班との合同研究会があまり行われてこなかった。今回を機会にして、来年度からこのような研究会を行っていききたい。第3部では、今後非文字資料研究をどのように行っていきたいかについて議論をしていきたい。

鳥越：ヨーロッパの絵引班に属しており、別の視点からコメントしたい。自分たちの研究班は、18世紀の絵画を分析して、同時代のコモン・ピープルの生活ぶりを浮かび上がらせようとした。ヨーロッパの絵画資料には、いくつかの特徴がある。まず第一は、文字テキストが長期的に優位であったことである。聖書をはじめ、ダンテの神曲などがあり、それを後から画像化する。有名人の大事件が絵画に描かれ、庶民はいるにはいるが、目立たない。19世紀後半になると、庶民に着目した絵がたくさん描かれるようになる。しかし、再現主義が排除され、絵画資料が非文字資料として使いにくくなる。そこで、次の点に注目してみる。①庶民を描くのに、それを資料としてこだわりすぎない。例えば、キリストの聖体を描いた絵があるが、そこには上層から下層までさまざまな人々が描かれている。庶民にこだわらないで見ることが必要ではないか。②写真が明らかに資料として使える。ただし、19世紀後半から。③文字テキストを再現した絵画も、使いようによっては使えるかもしれない。教会音楽や芸術音楽があり、18世紀にはほぼ現代と同じ楽譜に描かれる。楽譜は、文字資料である。その音楽が、20世紀はじめレコードが普及するようになるので、大衆像が記録化されるようになり、大衆音楽が優勢になっていく。すると、大衆音楽が庶民の思いを記録したもの

だと言えるかもしれない。それから、④絵画資料を、庶民の生活ぶりの解明とは違う目的に使ってみる。⑤非文字資料研究センターでは、これまで全く使ってこなかった、録音資料も使えるかもしれない。今後、これらの今まで使用していない資料を使えば、非文字資料研究センターも発展するのではないか。

内田：自分の所属は工学部の建築学科で、近代の建築史が専門である。ある建築を研究する場合、その図面を見るが、ない場合は自分で実測して図面化して使用する。自分は非文字資料を研究しているという認識はなかったが、福田先生に言われて非文字資料研究センターに参加させていただき、自分も非文字資料を使って研究している一人だと改めて認識している。その中で、大里先生が中心に行われている東アジアの開港場の研究班で、近代横浜の開港場に居留地も存在し、建築の専門家が必要だということで参加させていただいている。前センター長として、非文字資料研究を特化して、新しい研究領域を開発することに深く身を置いたわけではないが、研究センターでは、各班の非文字というものがどのような資料なのか、共有する領域を確立する必要があると思う。もう一つは、非文字資料を使って今までにない研究をさらに展開していく。非文字資料を使うことによって、今までの研究を見直し、発展させていく上で、この二つの考え方が必要だと思う。自分は、竣工写真や都市の写真をよく使う。あるいは、絵葉書なども近代にはたくさん存在している。これも資料として収集する必要がある。東アジアの開港場の研究班では、東アジアの絵葉書などを収集している。そして、絵葉書を使用した研究者からも情報を集めている。絵葉書を使った研究の展開も可能性があり、期待している。また、例えば絵画で描かれたものは真実を語っているのかというような疑問も非文字資料には出されるかもしれない。それに対して、絵画だけでなく写真などを参照してその意味を解釈する必要があり、それを一つずつ積み上げていくという基礎的なことは、この非文字資料研究センターでなければできないことであると思っている。そういう研究を、今後長く続けていってほしいと思っている。

佐野：黒田先生と福田先生のお話を、自分は史学方法論として聞かせていただいた。非文字資料は、文字資料に対する資料で、民俗学では言葉を聞き書きして文字化することが一つの方法となっていた。この非文字資料を広げて、建築や図像あるいは音声まで普及する話が述べられた。非文字資料は文字資料と総合して意味があると思う。そこで、非文字資料を強調することによって、どういった新しい歴史像が展開していくのか、非文字資料研究の目的について、黒田先生と福田先生にお伺いしたい。

また、福田先生から無文字社会の例が出されたが、川田順造先生が言うように、無文字社会は未開社会ではなく、豊かな社会だと言える。むしろ、文字を採用しない社会である。非文字の問題は、このような人類史から、生活史まで見ることができる。それから、黒田先生から、図像資料を使ったモノの命名という問題が出された。民具の標準名や基準名をつくることは、国際化された minguo の中で非常に難しい。歴史的なモノの名前は、そのままではないと言ったときに、非文字資料を文字資料と合わせて歴史解釈するときにどのような構成があるのかも二人に伺いたい。

福田：非文字資料という言葉で一括するほど研究は進んでいない。非文字資料が、歴史研究においてどういう意義を持つのか、どのように役に立つのかと言える状況ではない。たとえば、図像あるいは絵画が、このように文字記録では組み立てられないことを明らかにできるというような具体的なことは言える。しかし、包括して非文字資料とは何か、人類研究にこのように役に立つと言えるような状況にはないと思われる。

黒田：三点述べたい。21 世紀 COE プログラムを決めるときに、自分も力を貸した。その時に気に入っていたのは、日本常民文化研究所の大きな資産であり、それが一番の宝である。特に、漁村資料は全国的に見て見事な資料で、これをいかに活用するかが日本常民文化研究所の使命だと思う。研究は消えていくが、資産は連続性をもつ。漁村資料をいかに生かすかは、常民研から派生した非文字資料研究センターの役割でもあると思う。その公開を含めて、ベーシックな研究活動として掘り起こし、アチックミュージアムも含めてきちっと位置づければ、本来の使命の発展性は伸びていくであろう。これが第一点。第二点は、日本常民文化研究所あるいは非文字資料研究センターは、漁労活動の研究にきちっと継続性をもってほしい。自分の経験によると、東大史料編纂所の画像解析センターの画像解析センター通信を年 4 回発行し、その最後に「画像史料関係文献目録」をつけた。それは、基本的文献がどんどん増えることを期待してのことである。画像史料データベースとして発展しており、現在でも多く利用されている。この文献を、個人よりも研究機関にきちんと送っている。そして、研究機関で蓄積してもらおうよう依頼している。研究センターは、一貫した継続性をもって、ある情報を蓄積し、公開し、そして、それを発展していく。非文字資料研究センターにも、情報あるいは資料の蓄積をキチンと確立して、継続してほしい。第三に、研究センターは何かということである。史料編纂所はいったい何なのかというと、最先端の研究所ではなく、情報をたゆみなく蓄積し、それを的確に公

開していく研究所だと言い続けている。現に史料編纂所が公開している資料は、東大の研究所の中で、最も検索されている。情報を的確に蓄積し、的確に公開していく。それはいつでもデータベースで検索できる。この当たり前の研究ベースをやっていくこと。それを、自分たちの研究センターにふさわしい集中のさせ方で、効果的に演出することを是非やってほしい。

佐野：締め言葉。黒田先生から叱咤、激励された。網野善彦先生は、文字資料だけでなく総合資料学と言っており、あらゆる資料から見ていくということが常民研の伝統でもある。非文字資料研究センターは、非文字資料研究のノウハウを高め、また資料の蓄積も行っていかなければならない。われわれはさまざまな非文字資料研究を行っているが、お互いに協力して非文字資料研究を進めていかなければならないと思う。本日は、どうもありがとうございました。

(小熊誠)

【注】

- i 黒田日出男 (2018)「絵折櫃をめぐる(上) — 絵画史料論の基礎研究 —」東京大学史料編纂所『画像資料解説センター通信』83、「同(下)」(2019)『画像資料解説センター通信』84。
- ii 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」。
- iii 黒田 (2018)、5 頁。
- iv 黒田 (2019)、16 頁。
- v 同上、20。
- vi 川田順造 (1976)『無文字社会の歴史—西アフリカ・モシ族の事例を中心に—』岩波書店、3 頁。
- vii 高橋敏 (1985)『民衆と豪農—幕末明治の村落社会—』未来社、18 頁。
- viii 高橋敏 (1999)『近代史のなかの教育』岩波書店。
- ix 大月隆寛 (1992)『民俗学という不幸』青弓社、142 頁。
- x 吉川良和 (2003)『中国音楽と芸能—非文字文化の探求—』創文社、xxiii-xxiv、xxii-xxiii。
- xi 福田アジオ (1990)『可能性としてのムラ社会』青弓社、129-190 頁。
- xii マルク・ブロック (2004)『歴史のための弁明—歴史家の仕事—』岩波書店、ix 頁。
- xiii マルク・ブロック (1959)『フランス農村史の基本性格』創文社、6-7 頁。
- xiv 柳田国男 (1934)『民間伝承論』(伝統と現代社発刊、1980 年版) 71 頁。
- xv 柳田国男 (1935)『郷土生活の研究法』(『定本柳田国男集』第 25 巻、1970 年所収) 267-268 頁。